

# 高き志【こころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 13 (R元. 7. 11発行) 文責 校長 福田雅也

## 子どもは親のやったとおりに育つ(その2)

今年はずっとより遅い梅雨入りでしたが、ここ最近はずっと暑い日々が続いています。この時期は、子どもたちも外遊びができず、エネルギーが有り余っているようです。農家の方々にとっては恵みの雨ですから勝手なことばかりは言えませんが、遊ぶ場所がなく校長室にまで遊びに来ている子どもたちを、外で思いっきり遊ばせてあげたい気はします。

梅雨の時期に限らず、雨が降ったときに困るのが、スーパー等の屋外駐車場での建物までの移動です。ちょっとした距離なのですが、結構ぬれてしまうので、できるだけ建物に近い駐車場を探してしまうのは、私だけではないでしょう。

しかし、ある講演会で下の枠内のようなお話を聞きました。

その講演会の講師の方は、熱い思いで教育実践をされてこられた方で、退職はされていますが、現在も教育に携わっておられます。県下各地で講演も数多くなさっておられます。講演内容は、教師としてだけではなく、人としても学ぶことが多く、私の教育活動だけではなく、人生においても参考になることばかりでした。

この方の人生のテーマは、「利他奉仕 自分より先ず人のことを考え」というものでした。そのお考えのもとでの子育てについて、具体的な場面を例にあげて話をされた部分があったのです。

子どもと一緒に買い物に行き、スーパーなどの駐車場に車をとめるとき、いつも出入り口近くのスペースにとめないでください。近くのスペースはいくつか空け、出入り口から少し離れた場所に駐車するようにしてみてください。それを繰り返していると、子どもが尋ねてくると思います。「近くが空いているのに、なぜ、遠くにとめるの？」…と。そのときが、チャンスです。「買い物に来る人の中には、いろいろな人がいるでしょう。体が不自由な人、妊婦さんや赤ちゃんを抱えている人、お年寄り、病氣やけがの方などですよ。そんな方々が車をとめるとき、近くが空いてなかったら困るでしょう。近くのスペースはそんな人たちのために空けておくのですよ。私たちは、少し遠くても歩いていけるでしょう。」と答えてください。

私の自己中心的な頭ではどうも思いつかなかった考え方は、自分にできるかどうかはさておき、「納得」の一言でした。

まず、親として行動を示し、その行動を説明し、しっかりと意味づけることで子育てや教育をしていくということでしょう。子どもの行動を叱ってばかりだったり、何回も言って聞かせるばかりより、親が行動で示したことが、子どもの心にしっかりと刻まれることは間違いありません。

まさに、第8号でも触れました「子どもは親のやったとおりに育つ。思ったとおりに育たない。」ということなのだろうと思います。

人間がまったくできていない私は、いつも一番近い駐車スペースを探してうろうろし、近いところがタイミングよく空いたりすると、喜んでそのスペースにとめていました。時に、狙っていた場所に先にとめられたりすると、「くそっ」と思ったりもしていました。

「子育ては、親育ち」という言葉があります。修行が足りない私は、子育てが終わったにもかかわらず、親として育ちきれないまま、未だに未熟です。